フェムドムごっこ

フェムドムごっこ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20444330

R-18, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, 緊縛, ヨシ霊

師匠総受け『では無い』結婚済みヨシ霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、緊縛が含まれます。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

フェムドムごっこ

・フェムドムとは……フィメール ドミナンスの略で、ざっくり言うと女性上位（転じて受け上位）のＳＭプレイのことである。

※

「縄抜けの練習手伝ってくれ」

セーフハウスに帰ってきて真っ先にヨシフは霊幻に言う。
「かまわねえけど……メシ食ってからでいい？」
今日帰って来るのは知っていた。それなりにご馳走を霊幻は用意していたのである。
「うん」
疲れているらしいヨシフは珍しくちょっと幼なげに返事をして、
ご飯を一瞬で平らげた。
「いつも思うけど、もう少し味わって食えよ」
「訓練で早食いが身に付いてるんだよ。悪い、少し寝るわ」
ベッドに横になって直ぐにヨシフは寝る。その寝付きの速さも訓練のたまものらしい。
霊幻は仕方ないな、と肩をすくめて、食器を食洗機にかけてから、ヨシフが持って帰ってきた洗濯物を洗濯機にかける。
「これでよし、と……うわっ！？」
後ろから抱きつかれて霊幻は飛び上がった。
「霊幻」
甘えるように耳元で囁かれて、一瞬で身体に熱が点いてしまう。
「ぁ……ッ、や、るか？」
冷えた、煙草の匂いのする唇が首筋に押し付けられて、思わず霊幻ははぁっと吐息を漏らした。
「いや、縄抜け訓練が先」
しかしぱっと手を離されて、霊幻はがくっとする。

「お前な！……分かったよ。どうすんの？」
ヨシフという相手を選んで結婚した以上、仕事が優先されるのは仕方ない、と霊幻は諦めていた。
「悪いな。訓練用の縄と教本を持って帰ってきたんだが、１人じゃできなくてな」
「見せてみろ」
一通り教本を読んで、霊幻は頭に叩き込む。
「ん、多分できる」
「先生が器用で助かるよ。この年になると訓練も少なくなって、技術が身体から抜けるのも多いんだよなぁ」
「前から不思議だったんだけど、ヨシフって何歳なの？」
「……」
「ま、いいけど」
諜報員のヨシフは個人情報のほとんどが秘密だ。霊幻ですらヨシフの本名さえ、籍を入れる時に一度見たきりで、絶対呼ばないように言われている。年齢も当然秘密なのだろう。
「えーっと、練習用の縄がこれか。いざという時に切れやすいように細めなんだな」
「その分思ったより食い込むから、締めは程々にな」
「うーん、一回縛って貰っていいか？多分それで具合が分かる」
「いいけどよ……」
ヨシフはしゅるしゅると霊幻の手首を縛る。
「あー、なるほどな。こんな感じか。分かった」
無防備に手を縛られて立っている霊幻に、思わずヨシフの喉が鳴る。
「先生……自分に性的興奮するって分かってる男に、『縛って』って言うのはそれなりに危険だって理解した方がいい」
「は？ヨシフなら大丈夫だろ」
「告訴されてないだけで配偶者からのレイプは昔から多い」
「えぇ……っん」
するりとスウェットの裾から、喫煙者特有の冷たい指が潜り込んできて、霊幻はピクリと反応する。
「ほらみろ、ろくに抵抗できないだろうが」

「えっ何？今日はＳＭプレイすんの？」
「違う。アンタはもっと危機感を持てと言ってるんだ。仕事場でもどうせ警戒０パーセントなんだろ」
「だって、アイツらが俺に何かするわけ無いし……ッあ、う」
ヨシフの手に翻弄される霊幻に眉をひそめる。
「性的暴行事件の８割は顔見知りからだぞ」
「さっきから怖いこと言わないでくんない！？！？も……っ、勃つ……っ」
かり、と指先で乳首を引っ掻かれて霊幻が足を擦り合わせる。
「じゃあ俺の方の縛り頼むわ」
すっと手を服から抜かれて、しゅるしゅると縄を外されて恨めしげに霊幻はヨシフをねめつける。
が、大人しくしゅるしゅるとヨシフの手を縛ってやった。ヨシフの休みの期間はものすごく短い時もある。それこそ２時間後には出なくてはならないかもしれない。
ただ、どれだけ短くても、ヨシフは休みがとれたら必ず霊幻に会いに相談所やセーフハウスにやってくるのだ。それが分かっているから、霊幻はヨシフの意思を優先する。
「ん、基本は忘れてないな」
ぱらりとヨシフは手首を、縛られた縄から抜けさせた。
「おー、すげえ。えーっと、次は後ろ手縛りだな」
「頼む」
テキパキと霊幻は後ろ手にヨシフを縛る。
「よしよし」
またぱらりとヨシフは縄から抜けた。
「案外覚えてるもんだ。次頼む」
足首を縛っても、胴体を縛ってもするりとヨシフが抜け出すので、段々と霊幻は楽しくなってきた。
「なあなあ、これ抜けれる？」
「……めんどくさい縛り方すんな。この手の縛りは関節外さなきゃいけないから痛えんだよ」
「あっそうなんだ、ふーん」
霊幻はヨシフの手首の縛りを外す。

「……霊幻？」
「……興奮してきた。お前がさっき無防備に縛らせるな、って言ってたの、ちょっと分かるかも」
珍しく霊幻に後ろから抱きつかれて、わずかにヨシフの口角が上がった。
「一通り復習できたし、ベッド行こうぜ」
「最後に１回……試したい縛りがあるんだけど、いい？」
「ん？いいけど、何だ？」
たくましい胸板をウットリとまさぐる手が、鮮やかにしゅるりと縄をかける。
「は？」
しゅる、しゅる、しゅる！
手早くヨシフの上半身が拘束され、手が後ろ手で縛られる。
「いや、え？霊幻？」
装飾的で技巧的な縛り方にヨシフが戸惑っている間に、クッションの上に座らせられたヨシフは、足もそれぞれ片足を曲げて固定するあぐら縛りにされてしまった。
「はぁ！？」
「ヨシフ……実は俺、緊縛師に弟子入りした事があって、縛りの許可を貰ってるんだよ」
「センセイは何で変な技術はしっかりあるんだよ！？！？」
「変なとは失礼な」
挑発的な目をした霊幻が、ヨシフの膝の上に座って、ヨシフはピンと来る。
「今日は俺がリードする」
「それはそれは……童貞の先生がどこまでやれるのか、見ものだな」
「うっせえ！後ろは百戦錬磨だわ！！」
「……へぇ」
「あ、いや、誤解があるな？お前に……お前だけに、いっぱい、仕込まれたって、こと」
「……別に俺は」
「黙れよ、隠れヤキモチ焼きのくせに」

「なんだそれ……ん」
おしゃべりは終わりだ、と言いたげに、はむっと霊幻が激しくヨシフに口付ける。
「ん……ん、」
いつもはキスの時に霊幻をまさぐって翻弄してくる手が、ガッチリと後ろ手に固定されているのを、嬉しそうに霊幻は指先でツウッと撫でる。
「あ、ん、はぁ……ッ」
最初は好きにヨシフの口の中を探っていた霊幻が、徐々にヨシフの舌の反撃にとろけてきた。
「んぁ、んんんっ、う……」
ヨシフの舌に上顎を擦られ、柔らかく舌同士を絡められ、人体の弱点を知り尽くした瞳に灼かれて霊幻は真っ赤になる。
「も、お前、ほんと……」
「どうした？」
からかうようなヨシフの声に口を尖らせて、霊幻はヨシフの耳にちゅっちゅと口付け、首筋に唇を滑らせる。
（あーコレ、俺のセックスの癖か……）
霊幻が無意識にヨシフの愛撫を模倣してるのに、ちょっとヨシフは照れる。
「う……！」
ちゅうちゅうとヨシフをついばみながら、霊幻がヨシフの性器をぎゅむと掴んだ。
ヨシフから余裕の無い声が漏れたのに霊幻は満足する。
「もう興奮してるじゃねえか」
「そりゃあ、な？」
霊幻は淫らな期待に目を細めて、プレゼントをたまらず開ける子供のようにヨシフのベルトを外してズボンをくつろげる。
「……っ」
急所に無遠慮に触れられてヨシフの顔が反射的に歪んだ。
気づかずに霊幻はごくりと喉を鳴らしながらトランクスをずらす。
「わぁ……ッ」
ぶるん、と飛び出した逸物に、霊幻は満足気に口を歪めた。

「俺のちんちん……♡」
ふっ、と息をかける。
「いやお前のじゃないだろ」
「俺のみたいなもんだろ？こおんなに太くて、おっきくて、かたくて、あつくて、くびれも最高なのに……」
つつつ、と陰茎をたどる白い指が、くちゅ、とカウパーをトロトロとこぼす先端をこねる。
「っ、あ……！」
「俺の中に挿入りたい、って泣いてるんだから、たまんない」
ぺちゃ、と下手くそに子犬のように霊幻がフェラを始めて、ヨシフは驚いた。
「いつも頼んでもやってくれないのに、どういう風の吹き回しだ？」
「……んむ、ヨシフにやらされるのと、俺がやりたくてやるのは、ん、ん……全然違う」
ぬぽ、と暖かい口内に包まれて、ゾクリとヨシフに快感が走る。
「ふ、は……先生、じょうず、だッ……」
「ンふ……」
得意そうに息を漏らしながら、霊幻は片手でたどたどしくズボンとボクサーパンツをずらして脱いでいく。
焦らすように現れる白い肌に、ヨシフは興奮でくらくらした。
「いただきます♡」
慣れない手つきでゴムをつけ、霊幻はヨシフの肩を掴んで身体を支えながら、もう一つの手で性器を固定してそろりそろりと飲み込んでいく。
（最高だな）
霊幻が騎乗位じみたことをしてくれるのも初めてだ。
いつもは霊幻を快楽で支配する男を縛って、床固定バイブのように扱うことに霊幻は倒錯的にうっとりしている。が、ヨシフからすれば、滅多にない霊幻の『ご奉仕』にヨダレを何度も飲み込んでいた。
「あっ♡あ♡このちんぽ、さいこうっ♡おいし……っ♡」
児戯のように身体を上下させる霊幻に目を細めてヨシフは淡い刺激

を楽しむ。
「よしふっ♡きもちいっ？♡う、ん、っあ……♡よしふっ♡おれの
よしふ……っ♡♡♡」
トロリと快感に目を潤ませながら、霊幻がヨシフの頬を撫でる。
縄で浮き上がる見事な筋肉を、愛でるように白い指がたどった。
「ああ、……気持ちいいな。……ところで霊幻？」
ぐ、とヨシフは腹筋で股間を持ち上げ、ずんと霊幻の中を穿った。
「あ゛、ッ！？」
ごりっと内部をえぐられて、ぎゅっと霊幻はヨシフにしがみつい
た。
「全然アンタのイイところに当たってねえじゃねえか？ほら、当て
てやるよ」
筋肉に任せてヨシフは何度も霊幻のナカを犯す。
「やぁっ♡立て、無くなるからぁっ♡おれはぁっ♡よしふを気持ち
良くすんのぉっ♡……やめっ……♡ん、くぅっ♡♡」
子犬のように鼻を鳴らした霊幻を抱きしめて、ヨシフは更に突き上
げる。
「……え！？」
「抜けれない、とは言って無いぜ」
ぱらりと上半身の縄を落として、ヨシフは霊幻の骨盤を掴んで何度
も座らせる。
「んあ゛ッ♡♡あ、あ、イくぅ……ッ♡♡♡」
「ほおら、上手にイってみな？」
「〜〜〜〜ッ♡♡♡♡」
きゅうきゅうと良く知った形を味わいながら、霊幻はメスイキして
しまった悔しさにヨシフの首筋を甘噛みした。
「ぅ、っン……♡」
余韻に震える霊幻を片手であやしながら、ヨシフはポケットから十
徳ナイフを取り出して足の縄をズバッと切る。
「センセ、知ってると思うが、俺ぁ根本をセンセイのアナルの入り
口で擦るのが好きでな」
霊幻が息を呑むのを眺めながら、ヨシフは霊幻の身体をソファの上
に引っ張り上げ、ゴムを根本までしっかり付け直す。

「待っ……ああああッ♡♡♡♡」
ずずずずと隘路を押し広げられて、霊幻は背中を逸らした。
「はぁあンッ♡♡♡おくぅっ♡♡♡そんな、おくまでぇっ♡♡♡」
「狭いな、処女みたいだ」
ずっと誰も受け入れて無かったであろう狭さに、ヨシフは口角を上げる。
「……でも、ヨシフの形、してる」
「！……そうだ、なッ！」
煽られたヨシフが腰を打ち込んで、霊幻はたまらず小さな悲鳴を上げた。
「あぅ、あ、あ、あ、あぁッ♡♡♡んやッ、あ、きもちい……ッ♡♡♡」
するりと霊幻の腕が、脚が絡みついてくるのにヨシフはふっと笑う。
「俺もしゃぶられて、たまんねぇよ。アンタはどっちのお口も上手だなァ？」
かぁっと霊幻の顔が赤くなった。
「アンタだって入り口が擦れたら気持ちいいだろ？」
「……知らない……っア！？」
ぞわぞわと鳥肌のような痺れが身体を這い上がって、霊幻はぎゅっとヨシフに抱きついた。
「よしふ、来るっ、こわ、こわい……ッ」
「大丈夫だ、大丈夫……」
抽挿を止めないまま、優しくヨシフは霊幻に口付ける。
「ん、ン、んんんんん……ッ♡♡♡♡」
「……ッ！」
チカチカする目の前を瞬きで耐えようとする霊幻の締め付けに、ヨシフも精を手放す。
「きもちい……きもちい、な？れいげん……？」
「うあああっゆっくりずりゅずりゅすんなぁあぁ……ッ♡♡♡」
何度も襲いかかる甘イキに霊幻は腰をガクガクと揺らす。
「あ、悪い。もう抜くわ」
思わず残滓を擦り付けていたヨシフは名残惜しそうに抜去した。

「ふー……ッ」
この時の一服が最高に美味い。
新しい煙草に火をつけて、ヨシフは深く肺に煙をみたした。
「俺のヨシフ、か……」
「んだああ睦言を反芻すんなよ！！恥ずかしい！！！！」
「とっくの昔にアンタのモノだったんだが、知らなかったんだな」
ヨシフは霊幻の蜂蜜色の髪を撫でる。
「例えば遠い国で俺の頭を銃弾が打ち抜いたとしても。俺の魂は必ずアンタの所に飛んでいくだろう。……縄で縛らなくても、俺は俺の意思でアンタに縛られてるよ、霊幻」
むっと霊幻は口を尖らせる。
「馬鹿なこと言うなよ。俺はお前が身体付きで帰ってこないなら、他の男の所に行っちゃうからな」
「そいつは困ったな、それじゃあ俺でないと満足できない身体にしておかないとな？」
ぐっと手を掴んでヨシフは霊幻を立たせ、寝室へと連行する。
「へ！？ちょっ、俺、初めて騎乗位したから足がガクガク
でッ！！」
「知らなかったか？俺は実は隠れヤキモチ焼きなんだぜ」
「あああ知ってたのに俺の馬鹿ぁ……っ！嘘嘘嘘、俺はヨシフ一筋ですッ！！！」
霊幻は無情にも寝室に連れ込まれ、ベッドに無力に横たわる。

ぎゅっと恋人繋ぎされた手が、ギチリと煙に縛られた。

終わり